若手人材育成部会・研究支援報告書

氏名	川崎　雅子
所属大学名	大阪大学大学院連合小児発達学研究科
職位または学年（学生の場合）	D1
申請内容（渡航先、参加学会、ワークショップ等）	2021 PCIT International Biennial Convention(オンライン参加)
実施年月日	2021年8月25日～27日（ポスター発表：8月27日）
内容報告	・発表形態：ポスター発表（オンライン） ・発表内容： 標題：『Practice of Internet-delivered Parent-Child Interaction Therapy at Japan PCIT Training Center』 【背景と目的】 日本PCIT研修センターでは、2020年のCOVID-19蔓延に伴い、PCITによる治療を中断あるいはあきらめる親子が増えることが懸念された。この状況に対処するため、I-PCITへの切り替えを迅速に行った。 本発表の目的は、（1）COVID-19の制約下における当センターでのI-PCITの実践状況を報告すること、（2）様々な背景を持つ5例のI-PCITによる治療経過を紹介すること、である。 【方法】 参加者： － 5 組の親子；親7名、子5名（男児60%） － 子どもの年齢：M = 5.14, SD = 1.35 － 親の年齢：M = 36.43, SD = 5.80 手順： － 親はECBIとBDI-Ⅱを治療前、治療中、治療後に記入した。 － 親子はやむを得ない事情がある場合を除き、毎週I-PCITに参加した。 【結果】 COVID-19前後でのPCITフォーマットの比率について、2019年7月には100%が対面式であったが、2020年4月には100%がI-PCITに移行した。2021年8月現在は、それぞれ約半分の割合となっている。 ケースの経過について、治療を修了した4名すべての親においてECBI強度スコアが低下した。Case4とCase5は、CDIまたはPDIの途中であるが、大幅に減少していた。BDI-Ⅱに関しては、治療を修了した4名のうち、得点が減少したのは2名だけであった。治療を継続している3名のうち2名は、治療前と比較して得点の減少がみられた。 【まとめ】 本研究では、日本のCOVID-19下において、I-PCITの導入が可能であり有効であることを示唆している。今後の研究では、I-PCITが効果的な介入であることを確立するために、より多くのサンプルや、ランダム化比較試験等を用いた研究を実施する必要がある。 ・ディスカッション：米国のトレーナーより、以下2点の質問を受けた。 （1）対面からオンラインに切り替えた結果、複数の養育者が治療に参加しやすくなったという実感はあるか。（2）BDIが下がりにくい親が存在する点について、どのように考えるか。 発表者からの回答：（1）対面の場合クリニックに足を運んで治療を受けることへの抵抗を持つ親もいるが、オンラインは自宅から参加できるという気軽さから複数の養育者が参加しやすくなったと感じる。（2）子どもの問題行動が改善しても親のメンタル面が改善しにくいパターンとして、親自身のトラウマ体験等が関連しているように感じる。 今回の発表を通して、日本と各国のI-PCITの現状と今後の展望について、関連の研究者と議論することができた。これを契機に今後も、PCIT International Grobal Trainerとの連携をより密にしていき、海外との共同研究等の可能性も視野に入れていきたい。
備考	